

## 【あいじゃ】

「あいじゃ、って、なんじゃ」

ぼくはききました。

「水かけたんでしょ」

懐爺は即座にこたえました。

「さすがに、わかっとうのう。あんまし、あついで、にわに、みずまいとったんじゃ。そしたら、みずまくたんびに、あいじゃ、あいじゃ、って、じべたが、さわぐんじゃ」

「それは、地べたが騒いだのではなくて、地べたにはりついている、苔のおぼけが、声をあげたんですね」

「やっぱし、おぼけかのう」

「【あいじゃ】ですね。水をかけると、喜悅して声をあげるんですよ」

「あれは、よろこんどるのか。しんどそうなこえじゃったかのう」

「苔のおぼけですから、喜んでいるんですが、人間は意地悪ですから、喜んでいるとすると、水をまくのをやめますから、わざと辛そうな声をあげているんです」

「おしも、いじわるなのかのう。あんまししんどそうなので、もっとみずかけてみたかったからのう」

「金ちゃんにかぎりません。人間みなそうです。本質的にいじめるのが好きなんです。でも、だれかが見ていると、あら可哀想なんて同情したりするんです」

「なるほどのう。【あいじゃ】は、にんげんのほんしつを、わかっとうるか」

「地べたにはりついているおぼけですからね。いつも人間に踏んづけられている。」

【あいじゃ】にとって、人間はみんないじめっこなんです」

「だば、もっといじめてやるかのう。みずじゃのうて、おゆかけてやんべいかのう」

「それはひどすぎます。お湯をかけたなら、【あいじゃ】は死んでしまいますよ」

懐爺は、大袈裟に手をふりました。

懐爺の様子はどうも、いつもとちがう。

それを見ていたら、何となく【あいじゃ】ではなく、懐爺をいじめてみたくなりました。

「おぼけなら、なんとかするじゃろ」

といいながら、ぼくは引き上げて、次の日曜日のひるま、お日さまがぎんぎんがんがんのときに、釜で湯を沸かし、地べたの苔にお湯をかけてやりました。

もちろん遊び半分ですから、【あいじゃ】が降参したら、すぐにやめるつもりでした。

ところが【あいじゃ】ときたら、

「あいじゃ、あいじゃ」

とうるさいこと。

だいたい、人間がみんないじめっこだなんて、けしからん。

それで意地になって、お湯をかけまくりました。

どうも懐爺にからかわれた気になってきましたが、もう惰性で続けたのです。

「あいじゃ、あいじゃ」

まったくもって【あいじゃ】は、死んだ様子はありません。

それどころか、【あいじゃ】の声が、それこそ喜悅の声にすらきこえてくるではありませんか。

台所は熱いし、庭は暑いし、ぼくのほうが悪射病にやられて、あやうく死にかけたという、おそまつな結末でした。

やっぱり、いじめっこには、天罰がくだるのです。